

学習カウンセリングの可能性 ～語彙マップを使った学習Ⅰ～

徳島大学 総合科学部

Gehertz-三隅 友子

はじめに

頭に浮かんだイメージを紙に書き表したを「概念地図」と呼び、またそれがコンピュータのソフト（「インスピレーション」）にもあることを知ったのは、ここ数年のことである。実際にはアイデアを書き留めたり、整理するときには確かに子供のころから使っていたことも思い出した。その後自律学習について考えていた際、「無意識と意識」に関して読んだユングの「人は潜在的に中心から拡がりを持つものをイメージしており、それをまた描く」という、曼陀羅観にも出会った。またR.Oxfordが記憶ストラテジーの章で連想を絵や図にする技法を紹介していることから、筆者は自分の教育実践の中でこのような方法、筆者の用語では「語彙マップ」を使った教育を一度試みたいと常々考えていた。1999年の8月に担当した短期の研修（国際交流基金関西国際センターの日本語履修大学生訪日研修1999年8月から9月の約7週間に実施）において、学習カウンセリング註1)と日本語の授業の連携を試み、その中で、語彙マップを研修の柱の一つとした。その結果を考察、内省する間2000年の5月に石田孝子氏の論考「日本語教育におけるマインドマップの活用」（参考文献7）を読み、この試みが一般的に有効なのではないかと考えるにいたった。本稿はMind Mapping（マインドマップ）を基にした日本語学習における語彙マップの考え方、その理論的背景及び具体的な使用例を提示するものである。

1 Mind Mapping（マインドマップ）とは

1-1 Mind Mappingの目指すもの

Mind Mappingは、Tony Buzanの用語である。彼以外によっても、この概念地図についての解説書が書かれ、また英語をはじめ他の多くの言語にも訳されている。註2)いずれも、この方法を使うことによって柔軟で創造的な、そして右脳から全脳を使ったその人の潜在的な能力が引き出されて、様々な課題を達成できるとしている。Tony Buzanは、他者にMind Mappingの効能を説明するために次の5つを挙げている。以下はそのまま（日本語訳は筆者）引用する。

- ①アイデアを出し、様々な事柄を計画し、概念をまとめるための効果的な新しい気づきと記録の技術である。
- ②レオナルド・ダ・ヴィンチやアインシュタイン、ウォルト・ディズニーといった有名な思索家によって用いられたシステムである。
- ③新しい科学の知識を産み、脳の情報処理を進める能力と方法である。
- ④10歳の子供から成人、教師、会社や組織の管理者によって使われるものである。

⑤Mind Mapping について問われたら、上述の①から④に関して他のよりよい方法があるかどうかを質問者に反対に問いかけてほしい。

1-2 Mind Mapping の方法

1-2-1 準備

解説書によって多少の違いはあるが、準備として以下のもの、ことが必要とされる。

- ① 白あるいは色のついた紙（線や枠のないもの）
- ② 鉛筆あるいは色鉛筆
- ③ 筆記用具にあった消しゴムまたは訂正用の道具
- ④ ②とは違った質の筆記用具
- ⑤ マーカー（色をつけて際立たせる）
- ⑥ 好きな音楽
- ⑦ よい気分

単に道具がそろえば、Mind Mapping が行えるのではなく、⑥⑦のようにリラックスした状態も不可欠であり、マップの有効性に大きく影響があるとしている。

1-2-2 方法

実際に作成する方法としてやはり解説書によって多少の違いがあるが、おおむね次の手順が挙げられている。

- ① 用紙の中央に問題や情報の中心テーマを表す絵または図を書く。
- ② 思いついたことば、アイデアを周りに書き込む。
- ③ アイデアはキーワードあるいは図（絵・シンボル）で書き込む。
- ④ キーワードや図を中心テーマと太い線（幹）あるいは細い線（枝）で結びつける。
- ⑤ マーカーや色鉛筆を使ってアイデアを強調する。
- ⑥ キーワード、図、絵に評価の要素+（プラス）・-（マイナス）・0（中立）、を入れる
- ⑦ できあがった Mind Map を概観してさらに、分類を試みる
- ⑧ 課題（中心テーマ）を目標に照合させて、必要ならば実行に移すことを考える

この手順の④までに時間制限を設けるものもある。

1-2-3 学習における活用法

T.Buzan（参考文献1）は特に、1、思考を明確にする 2、アイデアを産出する 3、情報を整理する（その情報がどのような情報源からきているかも含める）の三つが、学習の場に有効としている。そして Mind Mapping は使う人が、自分の目的に合わせて、問題やテーマの大きさに見合った特大から極小のサイズのもので自由に作ることができる。学習の場では、試験対策、そのほかの問題解決のための意思決定、また拡大すれば人生設計（将来設計）にも導くことができる。これは、Mind Mapping の技法も学習していくものであることを示している。

2 Mind Mapping の学習観

上述の概説からも、Mind Mapping を学習のための道具としたとき、以下の点が明らかになる。すなわち Mind Mapping の作成が、①自主的な活動であること ②拡がりを持っていること ③視覚的な把握ができること ④成果物は作成者唯一のものであることである。これらは、今現在の教育の場でまさに必要とされている学習観と重なる部分が多い。

それは、まず学習自体を意識することにはじまり、他者からの働きかけを受けながら、最終的には自主的な取り組みであること、さらにその様々な活動の最終責任を負うのが学習者自身であることを意識することである。主体的に取り組むことから真の教育、学習効果が生まれるという考えが根底に存在する。

また別の観点からいえば、まずありのままの自分から出発し、そして思考を視覚的に表現し、作成物は自分を越えるものではなく、やはり自分の現在の状態を表していることに気づくことである。すなわちありのままの自分を受け入れるための道具であるともいえる。注意する点は、視覚的になにかすばらしいものを作る、また他人と比べて優劣を決めるものではないということである。学習を意識し、なおかつ課題と照合させた自己統制が必要である、このことから、Mind Mapping は、自己学習能力の開発の道具として、様々な学習活動の場面で使われる可能性を持つといえよう。

3 Mind Mapping と語彙マップ

Mind Mapping の対象はその言語を学ぶ学習者ではなく、その言語を第一言語とするすなわちその言語を自由に駆使できる人たちであることに留意しなければならない。ゆえにここでは言語学習において、すなわち日本語以外の言語を母語とする成人学習者がこの Mind Mapping を利用する場合、いわゆる語彙学習の一つの方法として考えたい。語彙マップは確かに Mind Mapping の一つの変形あるいは機能を限定させた特殊な使い方としてもよいだろう。次に実際に学習者が作成した語彙マップからその特徴に触れる。

参考資料1は、「日本料理」ということばを中心テーマに作成されている。「日本料理」すなわち学習者の母語による置き換えではなく、まず、料理名から始まっている。上部に材料そして、さらに野菜、海産物、肉類というカテゴリーがそしてその下位分類が、左には料理の味を示すことばがその下には調理のことば、そして右側には栄養素、そして台所用品のことばがつけられている。右下には食事のときのことば、さらに！マークの付で今回授業で学習した「遺伝子組み換え」を配置という構成になっている。

たとえば、「日本」ということばから、「JAPAN」といった一対一対応の訳語を並べるといったこれまでの語彙表と全く違うものであることに気がつく。作り手の言語に対する知識も重要であり、分類すなわちカテゴリー別にする大人の認識能力も必要である。そして何よりもこれは自分の観念を中心として拮がっていくものであるということである。このマップは一例にしかすぎず、同じ「日本料理」で始まったとしても調理のことば、行為のことばのみを扱うものがあったとしてもそれはそれでよいのである。

この学習者がマッピングをする過程を提出後に尋ねたところ、第一段階では自分が食べたことのある料理名が浮かび、さらに料理に関するいくつかのカテゴリーが浮かんだという。そのカテゴリーを書き留めた後、順に下位のことばを増やしていった。増やしながらか、母語で考えたことばを辞書で確認しながら書き込んだという。すでに知っていたことばより、「遺伝子組み換え」について強い関心を持ったこと、全く知らない情報だったため「！」印をつけたということである。さらに、ことばを

グループ毎あるいは自分のルールで線で囲み、またグループ同士を矢印で結ぶことによって見やすくなったと自分で感じたことを聞かされた。作成した人によっては、訳語で終わる者、またことばの持つ意味の内包と個人の体験につながる外苑という所まで語彙マップは広がる可能性を持っている。

4 語彙マップ使用法 ～学習カウンセリングの時間内で実際に行った導入例～

<学習カウンセリング 第一回 『語彙を増やそう』>

i 導入説明

- ・これまで日本語のことば、単語をどのように覚えていましたか
- 暗記や記憶の方法、あるいは語彙を増やすことについての考えを交換する
- ・今日は一つの新しい方法を紹介します
- ・これは一人でもグループでも有効な方法です
- ・この研修中に協力して「語彙マップ」と作ってみましょう
- ・頭をやわらかくする体操だと思ってください
- 作成された語彙マップを提示し、どのようにして作られたかを説明することも可

ii 連想ゲーム

- ・「日本」から連想することばを一人3つずつあげてください
- ・「日本」から出発して今度は連想を鎖のようにつないでみましょう
- いずれも板書や実物投影を使って発想の流れを確認する
- 「日本」から連想する名詞だけでなく、学習者のレベルによっては動詞、形容詞、擬態擬声語といったことばも可能であること、すなわち拡がりを提示する

iii 語彙マップの作成

- ・「日本」ということばのマップを作る（個人作業）
- 用紙（一人用として、B5 から A4 の用紙の中央に四角い枠を作っておく・方眼紙も可）
筆記具の準備。時間を制限し、手順は前述1の Mind Mapping に従う。
- ・出来たマップを概観し、自分で説明あるいはコメントを考える
- ・マップの提示（実物投影機等の使用可）及び発表する（全体あるいは複数で）
- どのような発想からこのようになったのか、できあがったものから何を考えたかを話す
- 他人と自分のマップを比較する
- ・全体で大きなマップを作る、その際にはことばのカテゴリー分類も試みる

iv 語彙マップの活用

- ・マップの中のことばをいくつか使って、例文を作る
- 例文を作るには、助詞や動詞等の表現を加える必要を確認する
- マップ作成が目的ではなく、スピーチ原稿の作成やどのくらい自分に背景知識があるのかを知るための道具であることを理解する
- マップ作成に対する感想やどんな活用法があるのかを全体で確認する

v 語彙マップの研修・日本語授業との関連

- ・ テキスト『日本を話そう』（講談社インターナショナル）の各課テーマの語彙マップ作成を指示する
- ・ B5サイズの方眼罫のノートを各自に配布する

vi 語彙マップの評価及び発展

- ・ 予習として作成したマップに、授業後、別の色等で新しく知ったことばを記入する
- ・ 教師による書き方の間違い等の訂正する
- ・ さらに母語で記入しておいて、後に辞書で確認、あるいは他者に質問し記入する

5 語彙マップ活用にあたって（考察）

この事例では研修内で日本語の授業と語彙マップを連携することを試みた。4では、その導入の詳細を述べた。すなわち、研修初期の学習カウンセリング時に語彙マップについて説明し、さらにその作り方について個人、クラスともに練習をした。その後語彙マップを学習者が積極的に作成していくために、B5サイズの方眼罫のノート配布した。このノートには右上に日本語授業のテキスト「日本を話そう」の課名（すなわち中心テーマ）を印字したものを張り付けている（参考資料1）。今回の試みと別の事例から以下の点が考察された。

これまで述べてきたように、語彙マップはことばの拡がり、連想と拡がりを大切にする。しかし、マップから例文を作り、さらにスピーチの原稿にしていくためには、マップから話したいこと自分が伝えたいことを日本語でいうにはどのようなことばや表現があるのかを考えるまたは探す必要がある。参考資料2は別のスピーチ「夏休みに考えたこと」の原稿作成の前段階で作られた語彙マップである。既存の知識から作ったマップを課題遂行のために、さらに語彙や表現を増やすにはこの段階での努力と教師の訂正及びヒントの提供といったものも必要なのである。しかし、自分を中心にした自己表現活動には外ならない。

また、従来の母語と日本語の対応語彙表は語彙を覚えることに焦点が当てられている。語彙マップを作ることと従来のもの語彙表を組み合わせることにより語彙学習の可能性を高めるであろう。暗記に関して言えば、視覚と記憶の関係が有効とされているが、この方法を選択する学習者自身の学習方略スタイルの嗜好が大切である。研修中はともかくも、一人で学習を進める際に何を選ぶかは学習者本人の自由である。たとえば、今回使用した『日本を話そう』は語彙表（日本語と韓国、中国、英語の対応表）が付録として備わっている。そこに自分のことばを加えることは簡単である。それにこのテーマで浮かぶ語彙を自由に記入していくこととテーマを学習した前後の語彙量と自分のテーマに対する興味の変化を確認することにした。学習者の中には、語彙マップが非常に気に入り、テキストのテーマ以外にも作成したマップでいっぱいになったノートを提出する者もいた。また最終アンケートでは、語彙マップをこれからも活用していきたいという数名が現れている。この逆であり関心を持たず従来型の語彙表をノートに作成していた者ももちろん存在する。自己表現活動、そして自己評価といった作業が苦手な学習者にとって決して強制するものではなく、その目標等を教師と学習者の間で理解し合う段階も必要である。

1枚の紙に表現することにより、自分の作成した成果物でもある語彙マップを他者と比較を行うことも、比較によって自分を知るために必要である。比較さらに自分のマップになかった拡がりをつけ加えていくことも可能である。この共同作業は、①学習者同士（母語が同じ、あるいは異なる）②学習者と日本人（日本語教師、日本語教師以外）といったいくつかのパターンが見いだされる。

このような語彙マップの長所及び短所を含んだ特徴をうまく活用し、また学習者の日本語レベルや学習観をふまえた適切な教師による提示また導入が必要であることは言うまでもない。教師自身が自分の活動の中に語彙マップを活用し、課題と照らし合わせた際のその効果と限界を経験し始めて、その道具の場合もそうであるように、有効なものとなるのであろう。

6 結びと今後の課題

本稿では、Mind Mapping の具体的な活用から、語彙マップを教育プログラムに導入することを試みた。語彙マップが全ての語彙学習に対応するものではないことは前述のごとくである。どのような点で語彙マップが有効でまたあまり有効でないのか、自分にとって語彙マップの学習は心地よいものなのか否かということを考え意識することが肝要である。

記憶に関しては、従来の語彙表や単語カードが良いという人もいるであろう。そういった学習をメタ的に見る、語彙マップ以外にも多くの自分に有効な学習方法があるのでないか探索する。決して一つのやり方に固執するのではない別の視点を養う場としての日本語学習を考える必要もあろう。最初は教師の導入による語彙マップから、そのオリジナルとなっている Mind Mapping に遡り、日本語学習から離れたところで自分自身の思考法の一つとして、学習者が将来の自分の課題に合わせて利用するという逆の発想も期待できよう。

本稿では、日本語学習の中での例のみをあげたが、日本語学習者と日本人の交流授業での活用等の実践も現在筆者は試みている。より多くの現場での実践報告を交換してさらなる語彙マップの利用を考えていきたい。

【註】

註 1) 筆者はこの学習カウンセリング、「教育という枠組みの中で、教師と学習者の人間関係のもとに、学習を意識化し、学習者が学習に対してより主体的になることを促進する場あるいは活動」とし、語彙マップをこの活動の一つとして研修の中に位置づけている。詳細は拙稿、参考文献 10～12 参照されたい。

註 2) 本論考は参考文献 1 から 6 にあげる Mind Mapping に関するものを参考にしている。5 以外は理論実践への手引きといった視覚的にも鮮やかものが多いのも特徴である。5 では Mind Mapping ではなく、Concept Mapping（訳語は同じ概念地図）と Vee 発見法を使う新しい学習方法の学習を述べている。ゆえに、本稿では両者を区別するために Mind Mapping と Concept Mapping を英語のまま記述する。

【参考文献】

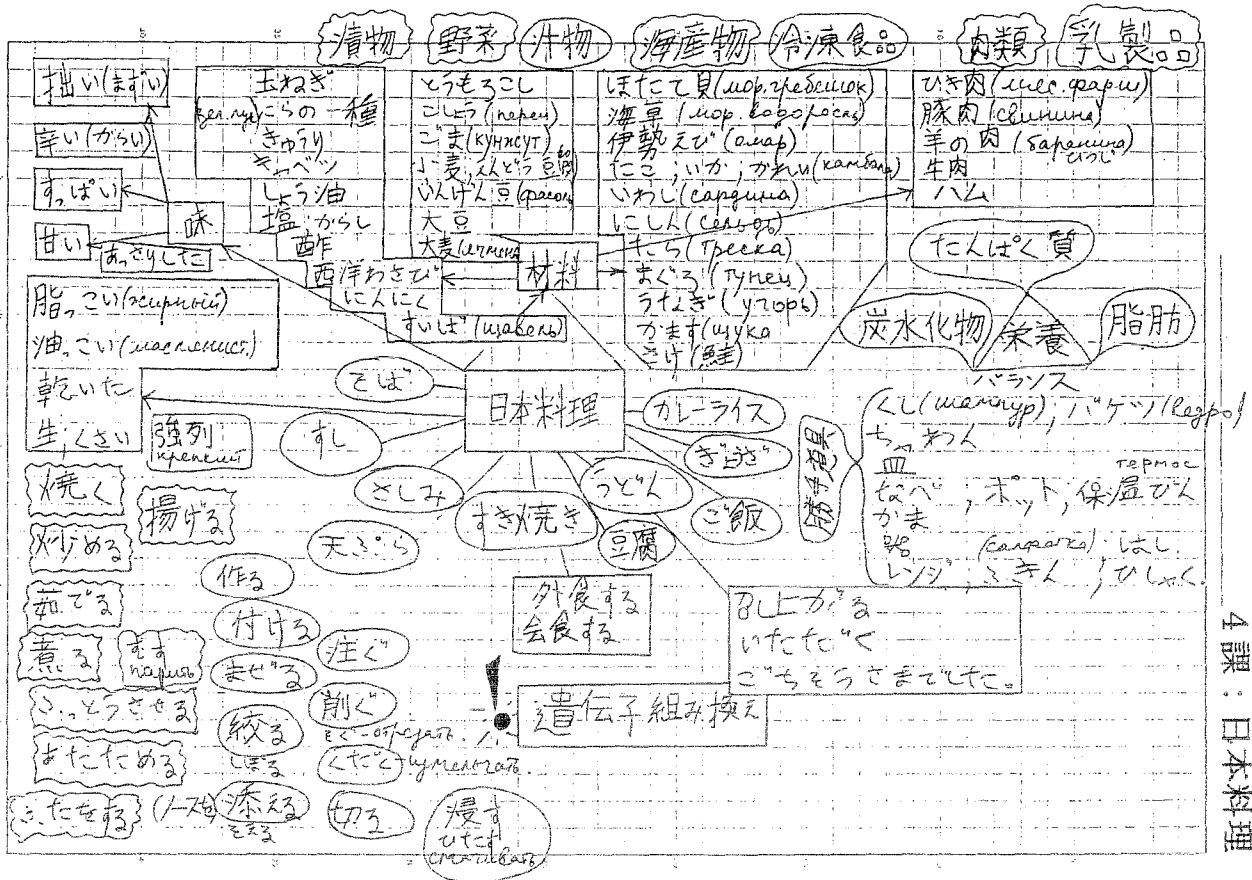
<Mind Mapping・概念地図 に関して>

- 1 Buzan, T.&V. North “Mind Mapping-Der Schluessel fuer deinen Lernerfolg” 1997
- 2 Hertlein, M.“Mind Mapping-Die kreative Arbeitstechnik-“Verlag, Reinbek 1997
- 3 Novak, J.D.&Gowin, D.B.”Learning how to learn”Cambridge Uni.1984
(福岡俊行訳 「子どもが学ぶ新しい学習法～概念地図法によるメタ学習」 東洋館出版 1992)
- 4 Oech, R.”A Whack on the Side of the Head”NewYork WarnerBooks 1983
(城山三郎訳 「頭にガツンと一撃」 新潮社 1990)
- 5 Wycoff, J.” Mindmapping” The Berkley Publishing Group.1992
(吉田八重訳 「マインドマッピング」 日本教文社 1994)
- 6 今泉浩晃『創造性を高めるメモ学入門』日本実業出版社 1987

<その他>

- 7 石田孝子 『日本語教育におけるマインドマップの活用』しあわせます山口1ーボランティア日本語教師養成ハンドブッカー 山口県日本語教育ネットワーク 2000
- 8 今井むつみ 「ことばの学習のパラドックス」 共立出版 1997
- 9 Oxford, R. ”Learner Strategies” Oxford Uni. 1990 (宍戸他訳 「言語学習ストラテジー」 凡人社 1994)
- 10 Gehrtz 三隅友子 「学習カウンセリングの可能性と司書日本語研修における取り組み」 第1回分野別専門日本語教育研究会報告書 1998
- 11 Gehrtz 三隅友子 「司書日本語研修における自律学習の支援体制について」 第2回分野別専門日本語教育研究会報告書 1999
- 12 Gehrtz 三隅友子 「学習カウンセリングの可能性ー短期研修における取り組みー」 第5回 ヨーロッパ日本語教師会報告書 2000
- 13 中村祐子 「ものの見方を見る見方」 北大路書房 1997
- 14 山下清美他 「教育への認知マップ」 垣内出版 1991
- 15 山下清美他 「こころへの認知マップ」 垣内出版 1994

参考資料1



4課: 日本料理

参考資料2

